慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鈴木安蔵氏の 明治維新政治史
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1943
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.1 (1943. 1) ,p.69- 71
JaLC DOI	10.14991/001.19430101-0069
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430101-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

情の、その發現を然らしめた、いはゞ、必然的なものであつたから、その立消えと見えるものにあつても、實は、
次で來るべき新時代への、先驅的な意義を有するものであつた」（二一九頁）。
かくて大山氏は第五章において、幕末農兵制の新展開と題し、文久二年の幕府の軍制改革から兵賦令の渙發——
その金納化としての兵賦金を論じ、これが維新後の國民皆兵制に發展する過程を跡づけられたのである。即ち當時
の社會情勢が必然的に軍制の改革を要求し、その先驅的表現として農兵制がみられ、そこに農兵の意義を認められ
んとするのである。かくて農兵論は一方思想的には武士土著論に辿られ、他方實踐的には時代的要求に基づく軍制
改革の端を作つたものとみられる。たゞ私は前述したやうな理由から、幕末農兵論の主流は後者に基づくものと考
へる。

なほ本書には附錄として、澁澤篤太夫（榮一）の農兵募集、幷びに、幕末の軍備調達の二篇を添へてゐる。わが國
における國民皆兵思想の起源はこれを遠く往古に溯ることが出來ようが、德川封建社會以降におけるその思想的變
遷を知る上に本書は要領よく說かれてゐる。評者も亦一讀益を享くるところ尠少でなかつた。厚く感謝すると共に、
これを江湖に薦むる。

鈴木安藏氏の「明治維新政治史」

加田哲二

明治維新の研究が、今日においても必要なことは勿論である。大東亞戰爭の下において、新しい日本的世界觀が
要請せられつゝあるとき、その世界觀の事實的根柢となるべきものは、日本の現實でなければならない。殊に、そ
の世界觀を、他の民族に對して把握せしめるとき、それは十分に事實によつて組織されねばならない。日本の世界
觀の基礎的要素はわが肇國の時代により、その文學的表現として紀記・萬葉があることは、何人も今日において異論
のないところである。その肇國の時代から三千年の歷史が、わが日本的世界觀の基礎的素材であることはいふまで
もない。しかしながら、現代人、殊に異民族としての現代人に對して、日本三千年の全歷史を急速に理解せしめる
ことには多くの困難がある。しかるに、維新前後からの歷史は現實にかれらの生活と結びついてゐる點において、
幾多の親しみと理解の便宜がある。

歷史家の研究は、さういふ現實的必要と直接關聯してゐないかも知れない。しかしながら、現在の時代的要求と
しては、研究者の態度の如何にかかはらず、かかる解釋を行つてもよいであらう。頃日明治維新に關する著述が比
較的眼に著くのは、かかる要求に答へたものであらうか。尾佐竹猛氏の「明治維新」（上卷、白楊社）土屋喬雄氏「維
鈴木安藏氏の「明治維新政治史」

新經濟史」（中央公論社）鈴木安藏氏「明治維新政治史」（中央公論社）などがそれである。

いま、こゝに紹介するのは、鈴木安藏氏の著述である。鈴木氏は、人も知るごとくわが憲政史研究の第一人者であり、既にわが憲法史に關しては、多くの業績を擧げてをられる人である。今度の「明治維新政治史」は、日本憲法制定の政治的條件の研究ともいふべきものであらう。明治維新を、日本の近代國家形成史とみてゐる著者にとつては、わたくしの解釋は、許容されるであらう。その篇別として、第一篇　歐米列强の東洋進出と日本の周圍、第二篇　德川幕府崩壞と王政復古、第三篇　近代國家の誕生も、このことを示すものである。

著者の立場は、日本を世界史の潮流の中においてみようとするものであつて、視野は甚だ廣く、科學的であるといふことが出來よう。歐米勢力の東亞進出を、その最初に遡つて、問題してゐるが、その點は、わたくしの贊同を惜まないところであつて、今日の東亞の情勢を理解するのにさへ、事實に及ばねばならぬのである。まして幕末の事態を理解するためには、歐米勢力の東亞進出の事態を正確に認識すること要するのはいふまでもない。それは、單に「黑船」の來朝のみを意味するのではなく、その本源が現象に遡ることをいふのである。著者は、その意味において正しく、近代世界史の意味を把握して、そこから近代日本の問題を追究してゐるといふべきであらう。

このことは、「黑船」來襲以後においても、著者の常に注意してゐるところであつて、海外情勢と日本近海における外國勢力の活動と日本國內の情勢との關聯を常に見失つてゐない。このことは、著者の前段の立場の繼續であるといふことが出來よう。

著者は、世界史の理解において、日本の事象の進展を眺めてゐるのであるが、その結果として粗枝大葉に陷つてゐない。本源的資料と後の評論的材料とを縱橫に驅使しつゝ、極めて精細に、世界史的事象に對處しつゝある幕開

京都雄藩の措置を研究し、これに論評を加へてゐる。

全卷五百頁に近い、しかも資料に充ちた著述を、さほどの困難なく通讀せしめるだけの才筆と明確性とを持つてゐる。歷史書の中には資料、資料といつて、左程價値のないやうなものまでも併べ立てて、讀者を惱ますものがあるが、鈴木氏の著述は、さういふ初學的資料珍重の風を見出すことは出來ず、讀み心地よいものである。それは、既に鈴木氏が維新の研究を大成しておられることを示すものであつて、わたくしの最も尊重する著作態度が現はれてゐるといふべきである。明治維新政治史中の最も科學的なものとして推稱したいのである。（中央公論社刊、四圓八十錢）

鈴木安藏氏の「明治維新政治史」